瓜哇紀行（上）

文學博士　松本文三郎

一　瓜哇途上

余輩が汽船 Rumphius 號に便乘して、シンガポールを發し、バタビアに向つたのは、昨大正九年一月三十日の午後三時半頃であつた。和蘭の汽船會社は二隻の汽船を以て、シンガポールと瓜哇北岸諸港との間を、毎週一回づゝ往復して居る、汽船 Rumphius 號は卽ち其中の一隻である。此等汽船は何れも四五千噸の大を有し、宛も遊覽船の如く、設備も頗る完備し、客室も割合に廣く、歐洲航路の汽船の狹小なる室內に多人數を積込み、手荷物の置場にも困るのとは、同日にして語るべからざるものである。下級船員は多く瓜哇人を用ゐて居る。彼等は身體倭小であるが、支那人の如く不潔ならず、而も甚だ從順である。余輩も今回の歐洲漫遊中には、日本船を始め　し、伊太利船、希臘船等諸國の汽船に便乘したが、此の瓜哇行の和蘭船程心地善かつたものはない。或は是れ伊太利船や希臘船の不潔にして亂雜なる反映として、特に著しく感ぜられたのかも知れぬ。從來此和蘭船は、日本人に對して餘り好い待遇を與えなかつたものゝやうであるが、歐洲戰爭以來、日本人の南海諸國に於ける事業の擴張と共に、彼に往復するもの毎航其跡を絕せぬ。余輩の往航にも日本人の同乘するもの七八人、歸航にも五六人、毎航何れも斯の如きであつたといふ。隨つて今や我邦人に對する待遇は、他の歐洲人と特に差別を立つることもな

いやうである。

シンガポールからバタビア間の航路は、僅かに四十時間に過ぎぬ。モンスーンの季節には、海上時に怒濤激浪に遭ひ、船體の動搖一方ならざることもないではないさうであるが、余輩此回の航海は極めて平靜にして、宛も湖上を馳けるが如きであつた。船は島と島との間を縫ひ行くので、殆んど陸地の見えざる所はなく、應接に遑ない位である。此點に於ては伊太利から希臘に向ふ海上と甚だ能く相似て居る。但彼にあつては海水の極めて清潔純淨であるのみならず、其見る所何れも歴史的背景に富み、古代文化の遺跡の存せざるなきに反し、此にあつては海水の稍混濁なる上に、(是れ或は當時雨期の爲めであつたかも如れぬ)、何れの山も何れの陸も、唯樹木の鬱蒼たるのみで、未開野蠻の地、固より何等歴史の語るべく、徵すべきものもない。此點よりしては此は到底彼と比倫すべからざるのである。

Rumphius 號は豫定の如く二月一日の午前七時頃バタビアの外港、Tandjion Priok に着した。今の港は和蘭政廳が一八七七年から十ケ年を費して內外二區に防波堤を築ゐたものであるが、其區域の狹小なるのみならず、バタビアの市街中心に至る迄には九哩を距り、汽車(此間約十六七分)の連絡あるとはいふものゝ、可なりに不便である。之とバタビアの港は直ちに市街の北方に接して居たのであるが、市の背面(南方)には火山脈が連續し最近には一六九九年に、其中の Salak 山なるものが大噴火をなし、先づ其港に注ぐ Tjiliwong を堰止め、而る後沙泥を流したが爲め、舊港は用を成さず、止むを得ず之より東方六哩を距て今の港を築かざるを得なくなつたのである。瓜哇に入國するものに對しては汽船の着するや、稅關に於て身元調をなし、若干の金を收めるのみならず、彼

有名なる植物園のある Buitenzorg より以内に旅行せんとするものには、特に許可證を得べき手續をもしなければならぬさうであるが、余輩はシンガポールよりの往復切符を求めて居たので、手續も極めて簡單で濟み、直ちに上陸し、バタビア領事館員の好意と忠告とにより、自動車で Hotel der Nederlanden に入つたのが、同日午前八時半の頃であつた。領事館員の言によると、此ホテルは日本人の多く宿泊する所で、特に日本人に對し好意を有つて居るものといふ。

入港の當日は日曜であるのと、爪哇では六月から九月迄が乾燥期で十一月より四月迄が雨期である爲め、余輩滯在中は午後には必らず、常に驟雨があり、見物には頗る不便であつた。で當日は唯其晴間を俟つて市街を散歩したに止まつたが、其後の經驗する所によつて見ても、爪哇に入り先づ第一に注意することは、同島の何處にも支那人の

苦力の一人も居ないことである。東洋の港には支那人の居ない所はなく、而して又至る所支那苦力の五月蠅いことも一通でない。勿論爪哇にも支那人の移住者の居ないことはないのみならず、外國人の中では支那人が最も多數であり、又最も勢力あるものである。現にバタビアの人口十一萬五千餘と稱する中に、支那人は其四分の一を占め、土人は約四分の三、而して歐洲人の如きは僅かに十分の一に過ぎない。隨つて支那人の社會上、商業上に於ける勢力の大なることは到底歐人の企及すべき所ではない。況んや土人に於てをや。彼等支那人は何れも永住の目的を以て來り、中には數百年來土人と同樣に土人の女を娶り、豪壯なる邸宅を構え居るものもあり、和蘭人は支那人の勢力を恐るゝこと一樣でなく、機會ある毎に之を抑壓せんとして居ることも疑ふべからざる事實である。一七四〇年偶々支那人が土人の和蘭政廳に不平を

抱けるものと私かに結宅し、反旗を飜さんとするや、和蘭人の驚愕一方ならず、男女長幼を問はず支那人を捕え、之を殺戮すること二萬人に超えたりともいふ。其後といへども支那人に對しては出來得る限りの抑壓手段を採つて居るにも關はらず支那人は巧に其鋒芒を避け、益繁榮し、商業の實權は依然として彼等の掌中に存するのである。斯く支那人の多數居住し、又其勢力の大なるを以て見ても、支那苦力の獨り此に渡來せざる筈はない然るに現に一人の苦力も居ないといふのは、彼等支那人が己等の地位と名譽とを維持せんが爲め、若し苦力の渡來することあらば、各醵金して之を本國に送還し、爪哇內地に其足を留めざらしむるが爲めであるといふ。兎に角支那人の勢力範圍內に存する爪哇に、支那苦力の居ないことは、殆んど他に其例を見ない所である。

第二に一般旅客として吾人の注意を惹くのは其服裝である。英領の殖民地にあつては、埃及でも印度でも乃至シンガポールでも、近來ツメ襟の服を着るものは一人もないといつて好い。軍人でも此等地方に在住するものは、例の小供のやうな半ズボンに、胸の襟の開いた上衣を着する。然るに蘭領に入ると殆んど總べてがツメ襟の服を用ゐて居る。又晩方バタビアの公園抔に散步して居るものを見ると、男子の帽を蒙むらぬものが殆んど過半である。是れ亦英領地方では絕えて見ない所である。此等は實に些細の事であるが、同じ熱帶地方に住するものであつても、國民の異なるによつて自から斯かる變態を生ずるのであらう。

二　爪哇の名稱

現時一般に爪哇人は其自國を稱して Jawa（又 Djawa）といひ、敬語には Jawi といふ。併し今日 Java と稱するものは、古來東西の旅行記史傳には諸種の名を以て傳へられて居る。尤侗の外國傳

(卷三)には瓜哇は古の闍婆國といひ、「唐曰訶陵、宋仍號闍婆、元封瓜哇國王」とある。卽ち唐代には訶陵といひ、宋には闍婆、又は社婆(唐書)と稱し、元に至り始めて瓜哇の字を以て之に充てたものと思はれる。尙ほ晉代には耶婆提といつたことは、法顯傳によつて之を知る事が出來る。此等は果して同一語音を譯したものか否か頗る疑はしい。で明史外國傳(卷三百二十四)の如きは、闍婆の條下、唐には訶陵と曰ひ、又社婆といふといひ「或曰瓜哇卽闍婆、然元史瓜哇傳不言、且曰、其風俗物產無所考、太祖時兩國幷時入貢、其王之名不同或本爲二國、其後爲瓜哇所滅、然不可考」ともあつて、闍婆と瓜哇とを二國の如くにも考へて居たものらしい。是れは勿論誤解であるに相違ないが彼等が同一國に對し如何にして斯く異なつた字音を以て寫出すに至つたのであらうか。

瓜哇の古傳說によれば、或時印度王の Prabu Jaya Baya なるもの、其臣 Peng'gawa をして外國に印度文化を普及せしめんと企てた。で彼に遂にシャヴ島に達し、羅刹の群に遭遇した。彼又此に大麥の盛に生育し、土民の之を以て常食とするのを見た。依つて彼は從來土人の其國を稱して Nusa Hara-Hara 又は Nusa Kendang といつたのを改めて、Yava-dvîpa と名づけたと。(Raffles-Hist. of Java. Vol. II. 67 ;Vol I. 2) 是れに由つて觀ると今日シャヴと稱する地方も、元と土人によつてはハラハラ島又はケンダン島 Nusaは島の義) と呼ばれて居たのを、印度人が之を大麥(Yava)の島、卽ちヤヴ島(梵語 dvîpa 俗語 dipa は同じく島を意義する) と命名したことが判る。乃ち唐代に訶陵といつたのは、此舊稱ハラの音を寫したことは疑ない。而して法顯の耶婆提とは、印度人の命名に從つたもので、Yava dvîpa (又は俗語の形 Yava dipa 若くは Yava-div) の音譯たる

ことも明かであり。今日の Java なる名稱は亦此 Yava の轉化なることも疑を容るべき餘地はなからう。社婆又は闍婆は卽ち此轉化した音を寫したものに相違ない。トレミーの Jaba diu (Java dios Ins lx) と稱するのも、Java の v が b と轉じ、(或は是れ亦アラビア人の媒介によつて知られたものかも知れぬ、アラビア人は v の音を常に b を以て顯はすといふ)。併し希臘人も vana を bane と稱する所から見ると、v と b との轉化は希臘人の間にも出來たものらしい。dvipa が dipa となり、更らに div, (diu) dib, dio と轉じたのである。亞剌比亞の旅行家は Zapage 又 Zabaj と稱するが、是れも恐らく同一語より生じ來つた轉化であらう卽ち Zapa は Java 又 Jaba であり、ge 又は j は div, (dive) dib より轉じたものではなからうか。而して爪哇なる語が元時代には如何に發音せられたか知らぬが、余輩は或は此アラビア人の Zapage を音譯したのではなからうかといふ疑を有するのである。爪哇の爪字は Giles によれば今 Kua と發音し、Ja とは Za とは頗る相違いやうであるが、アラビア人は k の音を常に j 又は g (軟音) を以て顯はす、例えへば Catolic (Catholic) を Jatolic となし、マルコポーロは之によつて Zatolic とも書いたといふ (Revondot-Ancient Account. Engl. F. Remarks on the 2nd. Account. p. 27) して見れば支那の爪の音をも誤つて Za 又は Ja に宛てたのではなからうか。併し余輩は音韻の學には通せぬから此點に就いては識者の敎を請ひたいと思ふ。尙ほ序にいつて置きたいのは、前記尤侗の外國傳には「爪哇古闍婆國、一名蒲家龍、今稱下港」とあることである。此にいふ蒲家龍とは勿論爪哇の一名ではない。恐らく當時支那人の專ら交通して居た港のある所の名であらうと思ふ。是れは今下港と稱すといふを以ても略推察し得らるゝ。で

或は是れは中部爪哇の港で、今和蘭支廳の在るPekalongsn のことではなからうか。今日では此港は廢れ、其附近の Samarang が中部爪哇物産の收散地となつて居るが、鐵道線路の未だ通じなかつた時には、前者が榮えて居たので、支那人はPekalongan 卽ち爪哇である如くに誤解したのかとも思ふ。

次に同じく爪哇と稱しても、古代旅行家によつては其範圍に著しく廣狹の差がある。例えばIbn Battuta の爪哇とは寧ろスマトラであり、今の所謂爪哇は之を Mul Java といふ。mul は梵語mūla で、根本の義である。マルコポロの爪哇もスマトラ地方を指したものと稱する。其他廣義ではスマトラ、爪哇、ボルヂオ乃至馬來半島を總括して爪哇ともいつたらしい。又極狹義に解すれば爪哇島の中でも、其中部以東卽ち古代印度人の其國を建てゝ居つた地方のみを爪哇と稱し、其西部

卽ち主としてスンダ人の住する所は特にスンダ島といつて之を前者と區別することである。併し現時は一般に爪哇島を大爪哇と稱し、其東、海峽を隔てゝ相接する Baly 島を小爪哇と名づくる。

尙ほ爪哇國及び爪哇人に關し、一二節を以て述べて置きたい事がある。其一は舊約全書中に顯はるゝ Javan なる語である。ラッフルス氏は其爪哇史の初に於て、創世紀の第十章にはノアの子孫が各其方言、宗族、邦國に隨ひ、諸方に分れたことを說き、其中に Javan の名を擧げ、又以西結の第二十七章には、世界に於ける通商の國民を擧げ埃及や波斯、亞剌比亞諸國民と共に Javan の名を出し、彼等は人身や銅器を Tyre の市場に貿易し、又彼等は彼此に往來し、光鐵や肉桂や菖蒲を市場に將來すとあることを述べ、之に次ぎ「聖典の Javan と現時の爪哇との關係を辿る如きは、他に自から其人あるべし」と述べ、巧に其迹を晦ま

し、而も何等か此兩者の間に關係あるかの如くに說いてあるが、是れは勿論研究に價せざることであらう。瓜哇の古代歷史は甚だ不明であるが、彼等の文化は印度人の彼に移住してから以後のことであつたらしい。而して傳說によれば紀元後一世紀既に印度文化の輸入せられたものゝ如くである假令ひ之が眞であるとしても、當時は尙ほ頗る幼稚なるものであり、其文化の最も盛となつたのは七世紀以後數百年の間にあつたものらしい。隨つて今より數千年以前瓜哇人の祖先が遠く地中海沿岸 Tyre の市場に迄各國の商品を將來したとは、到底吾人の考へ得ざることである。舊約書の Javan は寧ろ Jon 若くは Yavana で、希臘人又は其殖民地を指示したことは疑ないやうであり、今日の瓜哇とは何等關係のあるべきではない。

第二に注意すべきは、希臘、羅馬人の所謂 Taprobane 國と廣義の瓜哇との關係である。Taprobane とは普通梵語の Tāmraparṇi（俗語の Tanibapaṅṇi）と還元せられ、錫蘭島を指示するものと考へられて居る。勿論此語は梵語では「赤又は銅色葉」の義であり、何が故に錫蘭島を斯く名づけたかに就いては確として徵すべきものもないが、恐らく赤土の國と同意義であらう。でラッフルス氏も之に關しては前者よりも力强く瓜哇說を主張せんと試みて居る。今其理由とする所を見るに、其最も主なるものとしては次の三項に約することが出來やう、先づ第一には從來旅行家の記述する所によれば、此國は赤道によつて南北に二分せられ、其南方にあつては最早や北斗星を認むるを得ないといふことである。而して此の如き記述は最も旅行家の僻說や誤解を受くることの少きものであるが、錫蘭島には到底應用し得ざる事實であるといふのである。第二は Taprobane を梵語の tadas と vana とに分解し、taporana の轉訛であるとするので

ある。Taporana は苦行林を意義し、苦行者が此に其苦行を成す所といふ。印度と馬來諸島とは古代既に交通の存したことは疑ない、而して此等諸島の靜海の上に屹立し、鬱蒼たる樹木を以て蔽はれたるは、彼苦行者に最も恰好の地ではなからうか。印度隱者は恐らく古代既に此に來り其苦行に從事したので、斯かる名を生じたものと思はる。而して第三には馬來諸島には此等古代苦行者の遺物の今に存するものはないが、瓜哇には處々に之を發見する。瓜哇に於ける古代殿堂や彫像の技工を見れば、到底未開粗野なる土人の手に成れるものではなく、必らずや其文化の著しく進歩した印度人が、少くとも其監督の下に製作せられたことは疑ない。是れ卽ち彼苦行者の後世に遺した所ではなからうか。而してラッフルス氏は最後に尙ほ「今後更らに研究の進歩した曉には、恐らく瓜哇スマトラ又は寧ろ馬來諸港が、啻に古人の所謂

Taprobane 卽ち苦行林であるのみならず、又印度人の神聖なる諸島であつたことを確證し得るであらう」と附言して居る。但余輩はラッフルス氏の豫言も、今日では尙ほ未だ實現せられざるを遺憾とするものである。のみならず氏が古代苦行者の遺跡として擧げた殿堂彫像も、現時では七八世紀以前に溯り得るものは未だ發見せられない。勿論印度人のそれ以前にも既に此に移住して居たことは疑ない。法顯は五ヶ月間も瓜哇に滯在して居たのであるが、「其國外道婆羅門興盛、佛法不足言」ともいふ。卽ち四百年代の初既に盛に婆羅門敎が傳はつて居たとすれば、當時以前印度人の此に往來移住したものゝあつたと想像するのも、必らずしも理由ないことではなからう。が瓜哇の傳說を其儘に信じたとしても、印度人の此に來つたのは紀元後一世紀以前に溯るを得ないのであるから、紀元前既に此地を苦行林と稱し特に此地に來つて

苦行したとは、吾人の到底承認し得ない所である次に Taprobane を Tapovana と還梵するに就いても、vana と bane とは音相近いが、tapas 或は tapo が tapra となるか否は大なる疑問であらうと思ふ。勿論希臘人は外國語を强ゐて希臘化する習癖を有つて居るから、單に音韻變化の上のみからしては論ぜられぬが疑問は依然として疑問たるを免れぬ。第一の理由は最も眞らしいが、併し是れも本來 Taprobane なる地方が曖昧であつたので後世の旅行家は誤て馬半諸島をも斯く名づくるものと信じたのではなからうか。若しさうであるとすれば、後世旅行家が斯く記したからといつて必らずしも其錫蘭ではなく、馬來諸島でなくてはならぬといふ證據ともならぬのである。

元來 Taprobane なる名稱は何人の始めて唱へた所であるか判らぬが、今日存する記錄の中最も古いものは、恐らくメガステヂースであらう。でメガステヂースの斷片では Taprobane は本州卽ち印度と一河水によつて分たれて居るといふ。(M' Crindle's Megasthenes 62. 63)印度と錫蘭との間は島岐相連續し、河水ではないが宛も河水の如く、其幅極めて狹いので、メガステヂースは之を河水と誤つたのであらう。兎に角河水か河水の如き潮流によつて印度と分れ居るものとすれば、その錫蘭島でなくてはならぬ事を、假令ひ其語源の不明なるものあるにせよ、殆んど疑を容れないのである。馬來半島との間の大洋を河水とは如何にしても誤り得ない事である。併し後世ではラッフルス氏のいふが如く、Taprobane を以て錫蘭より遙かに東方スマトラ地方と考へたものゝ居たことも事實であるらしい。是故に Eusebius Renaudot の亞刺比亞旅行家の記事に對する注意中にもいふ「或學者はいふ、錫蘭は Taprobane ではない、スマトラが卽ちそれである」と。而して其學者の名を

舉げて、Andrew Corsali, Maximilian of Transylvania, Barthama, Gaspar, Barreyros. Pigafeta 等皆此說の主張者であるといふ。がトレミー時代には今日の錫蘭が卽ち Taprobane となつて居るからスマトラ說は更らにそれより後くれ生じた誤說であることはいふ迄もない。

北攝より發見したる切支丹遺物

橋川正

昨年九月二十五日の黃昏、雷雨を衝いて予は大阪府三島郡石河村字安元の一寺に漸く辿り着いた翌二十六日は隈なく空はれて快い朝の光を背に浴びながら目的地たる隣村の淸溪村字千提寺（せんだいじ）に向つた。一行はこの地の藤波君兄弟と予と合せて三人である。

これより以前、大正九年の正月に藤波大超君が訪問せられた砌、談偶々切支丹に及び勢ひ高槻の城主高山右近の名が出て來たので、君が鄕土に往時の切支丹遺物が殘存してゐるかどうか怠らず注意を願ふと告げておいた。その後同君はしきりに踏査され、それらしきもの二三を報道された。既に二月十八日附の書信の中に、今日訪ねんとする切支丹敎徒の墓碑の事は記されて居たのである。予の心大いに動かされ實地見聞を約しつゝ、荏苒日を過したが、今日はじめてその約束を果し得ることゝなつたのである。

墓碑は字千提寺小字寺山と稱する里道の傍小高